



大人の発達障害って そういうことだったのか

宮岡 等・内山登紀夫 著

●A5 頁272 2013年
定価 2,940 円(本体 2,800 円+税 5%)
[ISBN978-4-260-01810-4]医学書院刊

近年、成人の精神科医療の現場では、発達障害をもつ患者に出会う機会が多い。そればかりではない。大学のキャンパスや職場においても、発達障害者と思われる人々への対応に苦慮しているスタッフの声をよく聞く。主に成人を対象としてきた一般の精神科医も、もはや発達障害の概念なしに診療を行うことが困難になってきているのであろう。本書の著者の一人である宮岡氏等は、この状況を幕末の「黒船来航」に例えている。それほどまでに、(成人の)精神科医にとって発達障害は忽然と現れ、対応を迫られても、その具体的なイメージが浮かびにくい対象なのかもしれない。

本書は、発達障害に戸惑いを覚えている精神科医や医療関係者の立たされた状況をくんで編集されたものである。どうしても発達障害に対して不安や苦手意識をぬぐいきれない精神科医(医療関係者)には、どのように「黒船」に対する自身の臨床のスタンスを構築し直せばよいのかといった、そもそもの視点を教えてくれる。この点が、既存の「大人の発達障害」をめぐる書籍や雑誌との大きな相違であるといえよう。

本書は、宮岡氏が、成人の精神科医、および若き臨床医を育成する教育者の視点から、成人の発達障害者に出会ったときの戸惑いを、児童精神科医である内山登紀夫氏にぶつけながら、発達障害[主に自閉症スペクトラム障害(ASD)]に関する「頭の整理」をしていく形で、展開されている。第1章の「なぜ大人の発達障害なのか」に続く第2章「知っておきたい発達障害の基礎知識」では、ASDの診療に臨む際にわれわれがおさえておきたいポイントが、わかりやすく示されている。とくに成人の精神科外来のなかにも、相当数のASD者が含まれている可能性があるという指摘は、日常臨床場面で「発達障害をみる眼」をもつことの重要性を喚起してくれる。

第3章の「診断の話」では、ASDの診断に当たってのポイントが具体的に示されている。まずは、常にわれわれが「社会性、コミュニケーション、イメージーションの障害」というASDの3つ組の症状に加え、感覚過敏に注意を払って患者に向かう姿勢をもつこと、

さらには統合失調症にしろ気分障害にしろ、典型的な症状、状態像、経過でなければASDを疑う目をもつこと、そのためには操作的診断を超えた臨床力を身につけておくこと(特に若い医師の場合)が強調されている。そのうえでこの章では、統合失調症、うつ病、双極性障害、境界性パーソナリティ障害、強迫性障害、身体表現性障害との具体的な異同が述べられ、ASDを疑う際の具体的なポイントがわかりやすく語られている。なお、この章で興味深い著者らの議論は、精神科診断に当たって、外因、内因、心因に加え発達障害因という第4の軸をもつ必要性の指摘であろう。また発達障害においては、たとえ似た症状であっても、従来の症状論をそのまま用いることが必ずしも適切とはいえないという見解は、さらなる議論が期待される精神医学の課題ともいえよう。

第4章の「治療とケア—どう捉え、どうするべきか」では、ASD者が呈する症状の心理学的な意味を探るよりも、第一に環境調整を考え、たとえ心理的な意味を考えるにしても、ASD者の視点に立った実践的な意味を捉えることが、治療とケアに重要であると述べられている。本文では、その具体的な例も織り交ぜられ、例えば同じうつでも、発達障害の人たちの呈するうつの場合、「休みましょう」は彼らの混乱を招きかねず、具体的な期間などを明確に示す必要があることなどが示されている。

第5章「ADHDと学習障害」では、ここまでASDで触れてきた事柄が、ADHDと学習障害に関連しても討論されている。

繰り返しになるが、本書では成人の精神科医が確かめたかった疑問が、宮岡氏からダイレクトに発せられ、それを児童精神科医である内山氏がわかりやすく解説してくれている。何よりもそのやりとり自体に、これまで抱えてきた発達障害に取り組む際の不安を払拭する契機をつかめる読者もいるのではないかと思う。その意味で本書の構成スタイルには、発達障害に戸惑っている精神医療の専門家に対する「優しい眼差し」が感じられる。